
銀色の使い魔

ゼロの白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の使い魔

【Nコード】

N1959V

【作者名】

ゼロの白

【あらすじ】

攘夷戦争——それは、空から飛来した異形の集団——天人あまんとの軍勢に侍が命をかけて挑んだ“悪あがき”の名前である。

そして、そんな“悪あがき”の中で、一人の寂しがり屋の伝説が生まれた。

この物語は、そんな伝説が別の世界へと旅立ち、もう一つの伝説へとなっていくサクセス・コメディ・ファンタジーである！！

「……………いや、ねえよ！そんなジャンル！」

プロローグ：鬼神転移（前書き）

どうも、作者です。

今回は、この小説を読む気になっていただき、ありがとうございます。

至らない点も多々あると、思いますがなにとぞよろしくお願いいたします。

プロローグ…鬼神転移

侍の国――

この国がそう呼ばれていたのは、もう昔の話……………

十数年前、突如として空から飛来した異形の者たち――あまんど天人。

彼らは、その圧倒的武力を背景に江戸幕府に開国を要求してきた。

この国の武士たちは、もちろん刀を持ち抵抗を示した。

しかし、結果はあまりにも明白であった……………

結局幕府はそのまま武士たちを置き去りに不平等極まりない条約を締結。

この国は瞬く間に天人の巢窟と成り果てていった。

この物語は、そんな史実とは全く異なる道を歩んだ幕末で伝説と謳われた、ある“負け犬”の、語るも可笑しい奇々怪々な物語である。

そこは地獄のような場所だった。

空に熱く垂れこめた曇天が陽の光を遮り、その下の大地には見渡す限りのおびただしい数の屍が転がっている。

その屍は、あるものは腕を引きちぎられ、あるものは脳天に刺さった矢に驚くようにカッと目を見開きながら、そのまま息絶え、またある屍は『人』の形すらしてはいなかった。

生暖かい風が、それらの腐臭を伴って駆け巡り、その陰鬱で凄絶な大地——“戦場”を彩る。

そう、そこはまさしく“地獄”。神でも、悪魔でもない、生者が生み出した“地獄”であった。

そして、ここが“地獄”であるならば、当然そこには“鬼”がいるのだ。

「ハア、ハア、ハア……………」

浅く荒い呼吸が、そこに響く。

静かながらも、確かに生きている証。

この屍の海に立つ“ソイツ”は、全身を返り血で染め上げながらも、確かにそこに君臨していた。

「ハア、フウ、ハア……………」

“ソイツ”が視線をあげると、その視界には自分を取り囲む異形

の集団が見て取れた。

異形達は、“ソイツ”——全身を血の紅で染め上げながらも、なお白く、鈍く輝く“ソイツ”から警戒をはずすことはない。

“ソイツ”はそれを確認すると、一度顔を俯かせ、そして苦笑するかのように、その顔をゆがませた。

「……………つたく、祭りの誘いにしても豪勢すぎらあ」

“ソイツ”は、一度そんな軽口を挟むと、持っていた刀を再び握りなおした。

異形達もその動きに、持っていた武器を構える。

……………そして、次の瞬間。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！」

“ソイツ”は白い影を残しながら、凄まじい勢いで異形の群れに斬りかかっていった。

——その男、銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る様は

——まさしく

——やしや白夜叉

それが、“ソイツ”——坂田銀時のもう一つの呼び名であった。

「あゝ、ちかれたあゝ。さすがに今回ののはキツかったなあゝ」

さて、場面は切り替わり、ここは先ほどの戦場から少し離れた小川のほとり。

そこでは、さっきまで文字通りの鬼のような異形を相手に、それ以上の鬼のような死闘を繰り広げていた銀時が、さっきまでの獣のような目が嘘だと思ってしまうような、覇気の欠片もない死んだ魚のような目をして、傷をいやそうと、小川の水で体を洗っていた。

「それにしても……………、ツラとかはどうしたかなあゝ」

と、今までダルそうに、川で洗濯をしていた銀時がふと思いついたように呟いた。

「一応、敵さんはできるだけ、引きつけといたし、なんだかんだしぶとい奴らだから大丈夫だとは思うけどなあ……………」

銀時は川から顔をあげると、そのまま遠くを見るように今は星が彩る夜空を見上げた。

銀時がさっきまでしていた戦い。実は、あれは長い戦いによって限界まで消耗した自分の仲間達を逃がすためのものであったのだ。

銀時達の部隊は、度重なる戦闘がこのところ休む暇もなく続いており、正直部隊の立て直しも絶望的と言っていい有様まで、追い詰

められていた。

もう、このままでは、玉碎覚悟でぶっ込むしかない。そんな世迷言までささやかれるような雰囲気が出来つつあるほどだった……………

そんな時であった。天人がトドメとばかりの陸戦重視の特殊部隊を投入してきたのは。

銀時達の部隊は、その攻撃になすすべもなく敗走。結果、戦力を分散させるために、残り少ない部隊チリチリとなり、逃げ出すという苦肉の策を取ることとなったのである。

そして……………、その結果が銀時の今の状況であった。

銀時はその圧倒的戦闘力ゆえに、単独で軍隊と呼べる敵の部隊に囲まれ、味方と完全に分断、孤立してしまった。

結局、奇跡的に出し抜くことはできたが、恐らく自分が生きているとは思われていないだろう……………

部隊の立て直しなど、不可能であった。

なによりも……………、銀時もう“潮時”だと感じていた。

「……………とりあえず、江戸でも行ってみるか」

誰に言うでもなく呟いていた。

しかし、それは決別を意味していた。

戦場の鬼、鬼神と恐れられた自分との。

そして、何よりも、背負うという重圧からの逃避。

坂田銀時という“侍”が、ただの“負け犬”になった瞬間であった。

そして、“それ”はまるでその瞬間を見計らったように現れた。

「？　なんだ……………アレ？」

“それ”は唐突に銀時の視界に入ってきた。

ある程度体の汚れを洗い落とし、とりあえずツバをつける程度の応急処置を終えた銀時が着物を羽織りなおし、再び立ち上がろうとした瞬間であった。

銀時は、小川の中で光る何かに目を奪われた。

「月の光……、なわけねえよなあ」

突然現れた“それ”。普通に考えれば、怪しいことこの上ない現象であるが、銀時は特に取り乱した様子もなく、それを観察する。

“それ”は、一見すると小川の底に金銀財宝でも突然湧き出してきたんじゃないかと思いがうほど、神々しい光を放ち続けている。

形は、水の中ということもあり、よく分からない。

しかし、それは銀時の身長ほどもある巨大なものであることは分かった。

「おいおい……、なんかドラ○もんでも出てきそうな感じだな、オイ」

“それ”のもつ異様さを紛らわすためだろうか。思わず、銀時がいつもの軽口を叩く。

さすがの武神も、こんな得体の知れないものには、警戒するしかない様であった。

しかし、そこは、この武神も年相応、十代の少年である。

好奇心が捨てきれないのか、覗き込むように、ゆっくりと“それに近づいて行った。”

そこが、滑りやすいコケで覆われた小川であることも忘れて……
……

そして……

ツルツ

「……………へっ？」

次の瞬間。銀時は、声すらあげる暇もなく、その場から消えていた。“それ”と共に。

これぞ、世に名高いスッテンコロリン♪ダイブの誕生であった。

「宇宙の果てのどこかにいる、私のしもべよ！神聖で美しく、強力な“使い魔”よ！私は心より求め、訴えるわ！我が導きに答えなさい！」

晴れ渡る青空。地平線の彼方まで続く草原の一角。

そこで固まるとある一団。その中の一人、ピンクブロンドの髪をなびかせ、白いシャツと黒のプリーツスカートの上から、漆黒のマントを羽織った少女がそんな独創的な呪文を、天まで届けと言わんばかりの音量で叫んだ。

しかし……………

ボガアアアンツ！！

その独創的な呪文が起こしたのは、望んだ“使い魔”でもなく、まして魔法でもない。

草原の美しい新緑の大地を抉り出す、本日13回目の大爆発であった。

「また、失敗だ！『サモン・サーヴァント』もまともに出来ないのかよ！」

「さすが、“ゼロのルイズ”！」

「もう、飽きたんですけど」

そして、あたりに土煙が立ち込めると、途端に始まる罵詈雑言の嵐。

「ちょ、ちよつと失敗しただけよ!!」

ピン髪の少女——ルイズは、そんな何度目かになるかもわからない失敗にも、めげず周りで野次によく通る声で一喝した。

そして、再び爆発の起こった地点を、キツと意志の強そうな鳶色の目で見つめた。

しかし、彼女の内心は、そんな瞳とは裏腹にかなり追いつめられていた。

（また、失敗………？ そんな、これが——『サモン・サーヴァント』ができなかったら、私………!）

留年——そんなキーワードが、頭の中でチカチカと点滅して、ルイズは持っている杖が折れるんじゃないかと思うほど、拳を握り締めた。

（そんな………ことになったら………私………私、もう）

思わず、爆発地点から目をそらして、俯いてしまう。もはや、ルイズの心は召喚に対する期待よりも、恐怖のほうが大きくなるうとしていた。

その時だった………

「おや……………？ あれは……………」

ルイズの後ろから、そんな中年特有の低い声——監督官であるハゲ……………もといコルベール先生の呟きが聞こえてきた。

「！」

その声に釣られて、俯かせていた顔を再び上げるルイズ。

そこには、序々に晴れてきた土煙りの中。“何か”が、さっきまでは確実にいなかった“何か”が存在するのが見えた。

「ッ！！」

思わず息をのむルイズ。さっきまで、この世の終わるか、葬式のようなだったテンションが一気に上がる。

（え？ ウソ？ なんかいいる？ なんかいいる！！？ ホントにいる！！ 私、“使い魔”を召喚してる！！！！）

そして、それと同時に爆発するかのように自分の中で上がる期待。

まだ、その全容を見せてはいないが結構大きいことは分かる。

（ドラゴン？ グリフォン？ はたまた見たこともない幻獣！？）

そして、その影を見た瞬間にさらに上がるルイズの期待。

もし、彼女が『風』の魔法を使えたら、目の前の邪魔な土煙りをすぐにでも吹き飛ばしていただろう。

それほど、彼女は期待していた。

しかし、そこにいたのは……………

「」 チーン

白目を向いた体中、煤と泥だらけの白装束を着た銀髪の男であった。

「」「……………は？」「」

その姿を確認した瞬間。ルイズ、そして今までルイズを馬鹿にしていた野次馬、果てはコッパゲ……………ゲフンゲフン、コルベール先生までもが、目を点にした。

一瞬にして、静まり返る広場。しかし、次の瞬間……………

「平民……………、ゼロのルイズが平民を召喚したぞ！！」

その言葉と、共に広場は先ほどの沈黙を吹き飛ばすかのような爆笑の嵐に包まれた。

「わはははは！スゴイ、こんなの見たことないぞ！」

「さすが、ゼロのルイズ！私達にできないことをやってのける！！」

「予想の斜め上に行く奴だよ、全く！！」

そして、続くマシンガンのような誹謗中傷の嵐。

ルイズは目の前の事態に半ば呆然としていたが、その汚い………
………というよりは、幼稚な罵詈雑言の渦に、ようやく気がついたの
か、見る見るうちにその真っ白な肌を真っ赤に染め上げた。

そして……………

「こ、ここここ、これが、私の、神聖で、美しく、強力な、使い
魔あ~~~~~!!?」

そのシャウトは、澄み渡る青空と地平線の彼方まで響きわたった
という。

ブログ：鬼神転移（後書き）

感想、意見などがありましたらよろしくお願いいたします。

第1話：接吻契約（前書き）

第1話です。

第1話：接吻契約

———アレ？なんだこれ？空が真っ青だ

———いや、空が青いのは当たり前だろ。まあ、最近辛気臭い天気ばっかだったけど

———アレ？いやいや、俺が言いたいのも言うことじゃ無くね？

———アレ？つか、なんか騒がしくね？

———アレ？ていうか……………

「はい、どう？」

銀時が目を覚ました時、最初に目に映ったのは抜けるような青空だった。

それだけなら、まだいい。いつの間にか寝落ちしていたとも思えばいいだろう。

しかし、銀時が完全に覚醒し、周りに視線を向けた時。その頭は

『？』マークで埋め尽くされ、溢れかえることになる。

まず、銀時が横たわっていたのは、草原だった。

決して、森と荒野の境目にあるようなしよぼくれた小川のほとりではない。

雄大な大自然と、マイナスイオンをこれでもかと感じる青々とした緑の絨毯だ。

次に目に入ったのは、自分を取り囲む謎の集団である。

色とりどり、特に金髪が目立つ集団であり、銀時は一瞬天人の集団に囲まれたかとも思ったが、その割にはおかしい。

その集団は、どうやら銀時とそう年も変わらない少年少女ばかりであり、全員がお世辞にも戦闘に向いているとは思えない、いわゆる巷で噂になっているという『ハリー・ポッター』みたいな服装に身を包んでいたからである。

（おいおい、マジでどうしちゃったんだ？こりゃあ？アレか？最近はやりの“こすぷれ”って奴か？）

銀時は周りの状況から、そんな予想をしてみるが、それはやっぱりおかしいだろう。

というか、そのハ○ポタ集団の後ろにはなんだか、見たこともない生物群が控えており、天人の襲来でそういったものにかなり耐性のある銀時でさえ目をむくような生物までいるではないか。

（おいおい、なんなんだこりゃ？夢かこれは？これ夢か？どんだけ夢一杯、ロマン全開、ファンタジー万歳の夢だよ、オイ）

そんな光景を見て、銀時がいよいよ頭を抱え、頬をつねろうかと思いはじめた、その時だった。

「……………あんた、誰？」

ふいに、頭上から声が降ってきた。

そこには……………

髪色がショッキングピンクというありえない頭をした、それはそれは平坦な胸をした少女であった。

「……………俺はいつロリコンに目覚めたんだ」

「何言われたのか分かんないけど、ひどく侮辱された気がするわ」

これが、後に伝説として語り継がれることになる使い魔と少女――銀時とルイズとの最初の出会いであった。

とうとう邂逅を果たした銀時とルイズ。

銀時は今寝ころんでいた芝生から、起き上り目の前の少女と向き合っている。

その時、銀時は自分に向けられた何かバカにしたような視線が気になったが、とりあえず無視することにしておいた。

「やっと起きあがったわね！さっきは私に何か寝言で言ってたようだけど、しっかりしてよね、全く！」

と、銀時が起きあがると、少女はさっそく少女にそんな風にプリプリと頬を膨らませながら、銀時に怒鳴ってきた。

銀時は起き抜けに突然訳も分からず、怒鳴られたことになるが、目の前の少女は自分より頭二つ分も小さい少女である。特にダメーヂを負った様子もなく、それを受けていた。

むしろ……………

(……………やっぱ夢じゃなさそうだな)

そんなことを頭の中で、ようやく認識し始めた頃だった。

「ちょっと、聞ってるの!？」

そんな銀時に気がついたのだろう。ルイズが銀時にさらに詰めやりながら、睨みあげて来た。

「あ?あゝ、聞ってる聞ってる。うん、こりゃあ大変だな」

しかし、銀時はそれに適当に言葉を返すだけだった。

そんな銀時の態度にカチンと来たのだろう。少女が、今度はさらに声をあげて銀時に吠えかかってきた。

「何よその態度！？貴族の私が話してるのに、そんな適当な態度するなんて！あんた、本当にどこの平民よ！！」

その声は実に耳にキンキンと響く声であり、銀時は耳を塞ぎそうになる。

「チッ、うるせえな。ガキの頃の高杉みてえな奴だな」

さらに、思わずそんなこと呟いてしまい、少女はさらに顔を真っ赤にして銀時に噛みついてきた。

「な！？なななななッ！？ア、アンタ貴族に向って……………！無礼にも程があるわ！！そこに直りなさ—————」

と、少女が手に持っていた嫌にきれいな木の棒を振り回し始めた、その時……………

「ミス・ヴァリエール？いつまで、そうしているつもりですか？早く、『コントラクト・サーヴァント』を済ませてしまいなさい」

少女の背後から、中年独特の低さを持った声がかかった。

今度はなんだ？銀時は、そんな風に思いながら、そちらに視線を向けた。

そこには、やはり他の少年少女達と同じように、いかにも魔法使

いの格好をしたハゲ……………もとい頭の眩しい中年の男性が困ったような表情をしながら立っていた。

（おいおい、なんだ？あのオッサン？“こすぷれ”ってあんなオッサンでもするようなもんなのか？）

銀時は、その男性を見るとすぐにそんな感想を抱いた。

と、今まで銀時に木の棒を向けて騒いでいた少女はその男性が表れると、一瞬マズイという感じの顔になったが、すぐに持ち直すと、今度はその中年男性に詰め寄った。

「ミスタ・コルベール！こんな無礼な平民を呼び出したなんて、何かの間違いです！召喚をやり直させてください！！」

少女は、まさに必死という形相でそう懇願し始めた。

本当によく吠える奴である。銀時は本人の目の前で、自分を罵りまくっている少女を眺めながら、そんなことを思った。

一方、少女に詰め寄られていた中年もといコルベール先生は、そんなピ少女の懇願を正面から聞きながら、やはり困ったような顔をした後、ゆっくりと首を横に振りました。

「ミス・ヴァリエール……………、それはできません。春の使い魔召喚は、神聖な儀式だ。そう簡単にやり直しは認められない。いずれにせよ、彼を使い魔にするしかない」

「そんな……………、でも——」

少女は、それを聞いて顔を青くする。なんとか、食い下がろうとコルベール先生にすがすが、コルベール先生は厳しい表情をして、ルイズを見つめ返すだけだった。

そんな教師の様子を見て、少女もこれ以上は無駄だと悟ったのだろう。

ガックリと肩を下ろすと、ようやく置いてけぼりになりつつあった銀時に向きなおった。

(ん?なんだ? 雰囲気か……………)

今まで蚊帳の外で、仕方なく物珍しげに周りの様子(ほとんど全員がさっきの少女と自分のやりとりをイラつく視線で見っていたので、軽くガンを飛ばして、ビビらせておいた)をうかがっていた銀時は向きなおった少女の様子、というか顔が少し赤くなっていることに気がついた。

少女は少しの間人見知りのネコミたいに自分に敵意の視線を向けてきていたが、やがて諦めたように溜息をつくとこちらに近寄ってきた。

銀時はその様子、そしてそんな少女を見て、一際黄色い声が多くなった野次馬に嫌な予感がした。

「か、感謝しなさいよ！貴族にこんなことされるなんて普通は一生ないんだから！！」

しかし、少女は銀時のそんな内心など知る由もない。ズンズンと銀時の前まで、やってくると顔をまるで自分に言い聞かせるように、そう叫んでビシッと木の棒を銀時に向けてきた。

「は？ いやいや、待て待て、何？ 何するの？ 感謝って何？ 何かくれるの？」

銀時は、その行動に何故か大量の冷や汗をかき始める。

嫌な予感が止まらない。それは、長年の戦場経験で培われた戦士としての勘か、それとも生存本能か、とにかくこの状況に流されたら、ろくでもないことになる。

銀時は、向けられた木の棒をよけるようにのけざると、そのままジリジリと後退を始めた。

しかし、どうやら、少女もそんな銀時を逃がすつもりはないらしい。

「ちょっと、じっとしててよ！ すぐ、終わらせるんだから！！」

銀時があけた間をすぐに詰めより、そう一喝した。

しかし、そう言われて止まるバカがいたら、見てみたいものだ。

銀時はますますルイズとの距離を開けようと後退する速度を速めるのと同時に周りを囲まれたこの状況での、逃走ルートを構築し始

める。

それを見てルイズは、さらに「動くな！」と木の棒を突き付けてくるが、銀時はもちろん止まらない。

いよいよ、二人は広場の中央から、野次馬の円の端まで来てしまっていた。

「アンタ、どうしても私から逃げるつもり!？」

「当たり前だろ!こんな露骨に怪しいトコ、普通だったら全力で逃げるわ!！」

向かい合う二人は、睨みあいながらもお互いの出方をうかがっている。

野次馬達は、そんな二人をあるものは面白そうに眺め、あるものはもう呆れたように白けた視線を送り始めている。

しかし、二人にとっては真剣勝負である。

少女は木の棒を握る力を強め、銀時は足に力を込めた。

そして……………

「そう。アンタがそう言うつもりなら、私も相手になってやろうじゃない!（呪文を唱えながら、懷に飛び込む!）」

「させるかよ!（野次馬が薄い所を飛び越える!）」

2人は同時に動き出した。

と、その時……………

フワリ

「……………へ？」

銀時の体が、前触れもなく突然2，3メートルの位置まで浮いた。
思わず、目が点になる銀時。

その時、視界にこちらに身の丈ほどの長い木の棒を向けているさ
っきの中年オヤジが目に入った気がしたが、それは急に襲ってきた
落下の感覚により分からなくなってしまった。

（な、何が……………？）

そして、唐突に地面に落とされながらも、なんとか着地しよう
とした銀時の脳裏にそんな疑問が浮かぶ。

だが、それがいけなかった。

「もらったあああああ！！」

「へ？ぐぼはあ！？」

着地した瞬間。銀時は、今まで呪文を唱えていたルイズにタック

ルまがいに距離を一気に詰められ、馬乗りの体勢で地面に叩きつけられたのだ。

それには、さすがにどうすることもできない銀時。しこたま背中に強烈な衝撃を受けながら、肺の空気が全部押し出されるのを感じていた。

少女は、そんな銀時の腹の上で勝ち誇ったような表情を浮かべると、勝ち誇ったような笑みを浮かべ、早口にこう言った。

「ふふん、覚悟しなさい！これで仕上げよ！——この者に祝福を与え、我が使い魔となせ！！」

その瞬間。銀時の視界は、目一杯にドアップされた少女によって、塞がれることとなった。

だが、しかし。銀時は、その意味を理解する前に意識をフェードアウトすることになったのであった。

……………まあ、さすがに体勢整ってないときに、全力で股間に決められたら、気絶するしかないであろう。

第1話：接吻契約（後書き）

感想、意見お待ちしております。

色気もへったくれもありませんね。

第2話：状況分析（前書き）

第2話です。

第2話：状況分析

前回のあらすじ！

ほぼ強制レイプなりに、使い魔の契約を結ばれてしまった銀時（18）。

これからどうなってしまうのでしょうか……………

「う…………、イッテェ。なんだ？何で起き抜け、そうそう腹が痛いんだ？？」

銀時は、自分の腹部及び全身から来る痛みによって、目を覚ました。

「何か、とんでもなく訳の分からん夢を見てたような……………？」

その痛みに耐え、なんとか体を起き上らせる銀時。何故かは分からないが、体が妙にダルイ。まるで、熱湯で茹でられてのぼせたようだった。

しかし、そんな状態ながらもとりあえず自分の状況を確認することにする。

まず、自分がいるのは、どうやら見たこともない西洋風の小部屋のようだった。見ると、自分が転がっていた藁の横に、何かやけに

ブルジョワ臭い天蓋付きのベッドが鎮座しており、そのほかにも小さな丸テーブルやら、鏡台などが置かれている部屋を、ロウソクの淡い光がぼんやりと照らしだしている。

自分の服装も、どうやら変わりが無いようで、刀も自分の脇に転がされていた。

（？……………捕えられたわけじゃねえのか？）

それを確認すると、銀時はいよいよ首をひねり始める。

と、その時だった。

「やっと、起きたの？」

銀時の頭上から、何かデジャブを感じる声がかかった。

「え……………」

嫌な予感がしながら、銀時はそちらを振り返った。

そこには……………

「全く、さんざん手こずらせてくれたわね。おかげで、皆に余計な借りを作っちゃったわ」

ピンクの髪、平らな胸、そして高圧的な鳶色の目と、夢で見た少女の寸分違わぬ少女が腕組みしながら、自分を見下ろしていた。

「……………俺はいつロリコンに目覚め「それは、もういいわよバ

カッ!！」

こうして、銀時は自分がこの少女に捕えられるという、ここ最近一番の失敗をやらかしたことを自覚したのであった。

「……………ふうん、じゃあサモンだかゴエモンだかは、置いておくとして、やっぱりテメーが俺をここに連れてきたんだな？」

「ええ、そうよ。私が……………もちろん不本意だけど、あんたを『サモン・サーヴァント』で召喚したの。

……………あと、テメー呼ばわりは止めなさい! 使い魔の分際で! 私にはね、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールっていう立派な、高貴な、名前があるのよ!!」

あの後、銀時はとりあえず目の前で自分を見下ろす少女——ルイズと話をしてみることにした。

……………本当は今すぐにでも飛び出していきたいところではあるが、それにはこの少女が邪魔になるであろう。

いざとなれば、力づくにでもという考えもあるが、曲がりなりにも自分を昏倒させ、今まで目を覚まさないほどにダメージを負わせた人物である。

仕方なく、銀時は目の前のどうみても貧弱そうな少女にへりくだ

り（銀時の基準としては）、こうして呑気におしゃべりしてるわけである。

「なるほどな、一応分かった。で？不本意って言ってたが、じゃあなんで、俺はまだここでこうしてお前「ルイズ」…………ルイズ様とお話しているんでしょうかね？」

ルイズの説明を、この男として珍しく真剣に聞いた銀時。

それを聞く限り、どうやらルイズは自分の正体を知って捕えた訳ではなく、偶然に、しかも望まぬ形で連れ込んだということが分かった。

それならばと、当然のように銀時は自分を解放するようにルイズに言ってみるが……………

「それが出来るなら、私だってとくにやってるに決まってるでしょ？出来ないから、こうしてアンタなんかを私の部屋に入れてあげてるんじゃない。全く、少しは考えたらどうなの？」

返ってきたのは、やはりある程度予想していたものであった……………それよりも若干言葉が多くはあったが。

「……………まあ、そりゃあそうか」

銀時も、若干額に青筋を浮かべながら、それに頷いた。

ルイズもそれを見て、ようやく銀時が納得したと思ったのだろう。疲れたように溜息をつきながら、まるで小学生に言い聞かせるよう

に指を立てた。

「ふう、ようやく納得したみたいね。じゃあ、これからアンタは私の使い魔だから、しっかり私の言うこと聞くのよ？分かった？」

そして、銀時に向きなおるルイズ。銀時はしぶしぶそれに頷いて

.....

「つて、んなもん納得出来るかコノヤロー!!」

くれるわけなかった。

「なんで、俺がテメーなんかの.....そのなんだ？おつかい？とにかく、そんなもんしなきゃならねえんだ!!んなもん、どっかの野郎と乳繰り合って、テメーのガキにさせやがれ!!俺を巻き込むな、クソが!!だいたい、人を間違えてとっ捕まえておいて、なんなんだその態度!!?むしろ、慰謝料寄こしやがれや、一億万円!!!!!!それができねえなら、俺を解放しろ今すぐ!!出来なくても、やる努力をしろ!!!!!!お父さんお前をそんな消極的な女に育てた覚えはありません!! Yes we can! だバカ野郎がツ!!!!!! サブヒロインに人気投票搔っ攫われるヒロインの髪の色しやがって!!!!!!」

そして、文句の嵐.....というかマシンガンをルイズに浴びせかける銀時。

伊達に将来、字が多すぎて読者に読み飛ばされる漫画の主人公になる男ではない。

ルイズは最初はそれを目を点にさせながら聞いていたが、セリフ

の量が三行を超えたあたりから、序々にその表情を怒りのそれにさせ、銀時がセリフを吐き終わった後には、俯いてブルブルと震えていた。

「お？なんだ？もう、へばったか？泣いてんのか？うん？言つとくが、俺は女だからって容赦しねえからな！？おらおら、さっきの威勢はどうした、ご主人さまよお！！！」

銀時は、そんなルイズにももちろん容赦しない。原作でも分かっている通り、この男は基本的に気に入らないと分かれば、美少女にでも鼻フックデストロイヤーをかける作品の将来の主人公であり、ドSなのだ。

もう、完全にチンピラである。

ルイズは、そんな銀時の罵声を正面から受け止めながら……………

……………

「……………」

「いっ。」

ゆっくりと杖を握りしめ

「い、こいこ……………」

「んだ？ニワトリか？」

深く息を吸い込むと

「ッ！この、バカ犬うううううう！！！！」

「へ！？ぐぎゃややあああああ！！！！」

ボガアアアアンツツ！！

盛大な爆発を銀時の顔面にぶち当てた。

「もう、ホント信じられない！！主人に向って、あんな、あんな汚い言葉を浴びせかける使い魔なんて！！！！ううん、女の子に向って、あんなこと言うなんて！！！！頭どうかしてるんじゃないの！！！！？」

「……………それで、人の顔面を爆撃するお前も十分頭おかしいよ」

「何か言った？」

「イイエ、ナンデモアリマセン」

それから、銀時は体からプスプスと焦げた臭いを立ち上らせながらも、ルイズに文字通り蹴り起こされ、今は堅い床の上で正坐させられながら、延々とちよつと涙目で吠えまくるルイズの声を聞き続けた。

ルイズはそれこそもう一発か二発銀時に爆撃をぶち込ませるような剣幕であったが、そこはむしろ怒りのあまり呪文を唱えることも忘れてしまっているのか、なんとか杖を振り回すだけ振り回し、声が枯れるまで銀時に叫び続けるだけで手一杯になってくれている。

「もう、ホント信じられない！！だいたい、私だってアンタなんか召喚したくなかったわよ！！でも仕方ないじゃない！！使い魔は、普通その者に最も適した物が召喚されるってだけで、選べることなんてないんだから！！！！私だって、私だって……………本当はドラゴンとかグリフォンとか、もっと……………グスッ……………そうじゃなくて、ネズミやイタチだって……………エグッ……………それが、それが……………平民って……………アンタ……………みたいな……………最、悪……………の……………ウエエ……………ンン！！！！」

結局、持てる限りの罵詈雑言を銀時に吐きつくしたルイズは、その場にペタンと座り込み、もう枯れ果てた喉を潰さんばかりの、大声で泣き始めてしまった。

もう、この際近所迷惑とか知ったことじゃない。

(……………泣きてえのは、コッチだよ全く)

銀時はそんなルイズを眺めながら、心の中で溜息をつき、そのままルイズが落ち着くまで諦観していた。

さすがに、元凶がこの状況で励ましの言葉はないだろうって……………

しばらくすると、ルイズはようやく落ち着いたのか、泣き疲れたのか、大人しくなり「ヒック、ヒック」と体を小刻みに動かしながら、銀時に背を向けていた。

「……………落ち着いたか？」

銀時はそこに、背後からボソリと声をかける。

ルイズは一度その声にキツとものすごい形相で銀時を振り返ったが、さすがにもう疲れたのだろう。

すぐに、舌打ちをしながら顔を背けると、勢いよく立ちあがった。

「……………もう、寝る」

そして、たった一言。それだけ言うと、銀時に一度も視線を向けることなく、ベッドに倒れ伏した。

銀時は、黙ってそれを見送った。いや、それしか、できなかった。

(……………ハア、何ちよつとカワイソーとか考えてんだ俺は。最悪だぞ)

自分の内心に毒づきながら。

しばらくすると、ベッドの方から規則正しい寝息が聞こえ始めてきた。

それを確認すると、銀時はそっと部屋を抜け出すことにした。

別に逃げるつもりではない。いや、最終的にはそれも視野に入れているが、今は“何故か”そんな気分にはなれなかったのだ。

松明で照らされた薄暗い廊下を進んでいく。今、気がついたが、どうやらここはかなり巨大な石造りの建物のもようであった。

(本当にここはどなんだ……………?)

それを見て改めて、銀時はこの場所の異質さを感じ始めていた。

どう考えても、日本ではないだろう。それは、ここについた瞬間。あの異人の野次馬共を見た瞬間から分かっていた。

では、西洋か？これも、違うような気がする。なぜなら、西洋の人間は、まだ天人についてそこまで知ってはいない。なのに、あの異形の怪物を従えて……………

ここで、銀時はある可能性に思い当たる。

いや、可能性というのもおかしいくらいに、バカげた話だ。

(いやいやいやいや、何考えてやがる俺。んなことあってたまるか……！)

そうやって、自分の考えを自分で否定する。

しかし……………

『あんたを“召喚”したのよ』『今日から、アンタは私の“使い魔”よ!』『“ドラゴン”や“グリフォン”がよかったのに!』』

頭の中には、そう言えばあの少女が叫んでいたキーワードが点滅し始める。

そう、天人が襲来し、意味の分からない単語が交わされるようになった今日、この頃の江戸でもそんな言葉は交わされていない。

そんな……………“魔法使い”が使うような、ファンタジーな単語。

(……………違う、違うよな?アイツのあの爆発もなんかの手品、天人が持ってきた最新式の爆竹みたいなもの……………)

ここがどこだ分かる材料はない。しかし、ここが自分の知る場所とは、根本的に違う場所だという証拠、言葉は次から次へと溢れかえってくる。

銀時は、薄らぎむいものを感じて、思わず手近にある窓に寄り添った。

しかし、その行動が、銀時に決定的な証拠を突きつけることになる。

「……………ははは、勘弁してくれ。金〇じゃねえんだぜ?」

そこには、少なくとも、銀時の住んでいた惑星・地球ではありえない……………

輝く双月が浮かんでいた。

「異世界って……………超展開にも程があるだろおおおおお
！！！！」

銀時のシャウトがハルケギニアの夜空に響き渡った。

それは、はたまた奇跡なのだろうか？それとも、いるかも分からない神のイタズラ？

それとも……………

第2話：状況分析（後書き）

原作とは結構違った展開ですが、いかがでしたでしょうか？

感想、意見お待ちしております。

第3話：覚醒幻夢（前書き）

第三話です。

ああ、話が重くなりすぎている……………

第3話：覚醒幻夢

前回のあらすじ！

ついに異世界に来てしまったことを自覚した銀時。

これからどうするのだろうか……………

場面は戻って、ここはルイズの部屋。もう、ロウソクの光も消え、月明かりだけが頼りの暗い部屋に銀時はフラフラとした足取りで戻ってきた。

別に特に理由があったわけではない。しいて言うなら、まだこの部屋に刀を置いたままにしていたからである。

銀時は扉の開け閉めもそこそこにゆらりと部屋に滑り込んだ。

扉の音を気にする余裕も無かったが、どうやらこの部屋の主は気付かなかったようだ。

部屋に入り込むと、銀時はドカリと椅子に腰かけた。その表情はよく見えないが、どうやらひどく焦っているのは分かる。

(……………頬っねる以外になんかコレが夢だって証明できる材料なかったっけ?)

そんなどうしようもないことを考えるくらいに焦っている銀時であつた。

(……………って、そうじゃないだろうよ俺！ここに来ての現実逃避は無意味すぎるだろ俺！！)

と、そんな風に意外に追い詰められやすい銀時。思考が変な方向に行き始めたが、なんとか自分でツツコンで軌道修正することで一応冷静に戻れたが、混乱していることには変わりがなかった。

(月は……………やっぱ相変わらず○玉のままかあ)

思わずさつき確認した月をもう一度ここから確認してしまう。

しかし、もちろんここは夢ではない。銀時の卑猥な言葉に沿うように、その月は二つ空で燦然と輝き続けていた。

ここまで来ると、もう本当にどうしようもない。銀時はいいよ異世界に自分がいるという事実を受け入れるしかなかった。

(はぁ……………ていうか、なんでこんなことになってんだ？どうしたら、異世界とかに来る超展開が普通に起こるんだよ！！俺はタ○ヤじゃねえんだよ！！！)

そして、否定できない事実が自分の身に降りかかると、それに腹がたってくるのが人間というものである。

銀時も、窓から見える月が二つという動かしがたい事実を目の当たりにし、もう逃げ場が無くなると、その例にもれず、頭を抱えて葛藤し始めてしまった。

なんか誰も知らなそうなジャンプネタまで使っている。

(全く……………ってか、そもそもなんで俺なんだ？あのガキは事故とか不本意とか言ってるやがったが、お前それじゃあ俺が納得できねえよ!!！)

しばらく、葛藤すると銀時はふとこの状況の一端を担っているだろう少女に振り返る。少女は、さっきの大泣きが嘘のようにベッドですやすやと眠っており、銀時をイラつかせたが、さすがにその前のあれを間近で見ている身としては、少女を叩き起こして詰め寄るなんて、鬼畜の所業できるはずもなかった。

(……………ていうか、俺は何、中途半端な同情してるんだよ！今はそれどころじゃねえだろうが!!！)

そこまで考えて、銀時は自分の心境が何かおかしくなっていることに気が付き、頭をかきむしった。

実は、微妙にそこで左手のルーンの力が関わっていたりしたのだが、銀時は気付く由もなかった。

銀時はしばらくそうやって、一人モンモンと頭を抱えていたが、しばらくすると

(……………ハア、アホらし)

考えるのが面倒くさくなったのか、急激に冷めた表情になり、溜息を一つついた。

そして、またふと振り返り、背後の不機嫌な眠り姫を見る。

「……………」

しばらくそうしていたが、やがて銀時はおもむろに立ち上がると、その眠り姫の鎮座するベッドへと近づいて行った。

……………もちろん、特に意味なんて無い。断じて無い！

と、そんなこんなで銀時は姫の顔が見える位置にまで移動し、その顔を覗き込んで見る。

その表情は、幾分疲れているように見えたが、意外に可愛らしいものであり、少し陰ったものを予想していた銀時は拍子抜けした。

「……………意外と大物なのか？」

銀時が思わずそんなことをボソリと呟いてしまう。

と、その時だった。

「う、ん……………」

今まで健やかに眠っていたルイズが突然唸り始めた。

（あ、やべ、起こしたか？）

それを見て、すぐさま顔を引く銀時。しかし、どうやらそれは起きそうだったのではなく、うなされているだけのようだった。

(……………って、うなされてる?)

思わず銀時は再びルイズの顔を盗み見た。

ルイズは何かボソボソと言っているらしく、気になった銀時は耳をそばだてる。

そして……………

「母……………様、ごめん……………なさい……………。私、頑張るから……………もっと……………頑張る……………から……………だから……………行かないで……………ください……………」

銀時は、その目から流れる一筋の涙を見てしまった。

「！」

それを見た瞬間。銀時の脳裏に、まるで走馬灯のように一つの言葉と映像が駆け巡った。

—————行かないでッ！先生エー！！

「ッ！！」

思わず頭に手をやり、それを押し止める銀時。

(クソッ……………!!)

心の中で悪態をつく。

しばらくすると、それは治まったが銀時の額には、少し肌寒い春の夜だというのに、大量の冷や汗が浮かんでいた。

(……………なんつーもん見せてくれるんですか、このガキは)

銀時はその冷や汗をぬぐいながらも、今は再び静かに眠り続けるルイズをねめつけた。

気分の悪くなった銀時は、とりあえず窓を開けて、風に当たることにする。

ルイズに気づかれるかとも思ったが、このままではまともに頭も回せないと思っただった。

夜風が銀時の頬を撫でた。

銀時は、ふと空を見上げる。そこには、月以外いつかの日戦場の休息で見た星空と、よく似た空が広がっていた。

「……………何考えてやがるんだ、俺はさっきから。ホームシツクですかつての」

銀時はそんなことを思い出してしまう自分に舌打ちしながら、乱暴に頭を振った。

そうやって、過去のことを頭から振り出すと、今度はさっきのルイズの涙が頭をよぎった。

『母……………様、ごめん……………なさい……………。私、頑張るから……………もつと……………頑張る……………から……………だから……………行かないで……………ください……………』

まるで、幼い子供の声。いや、実際その通りだったのだろう。

あの時のルイズは、確かにあの高慢ちきな小娘ではなく、一人の、たった一人の温もりを求める幼い少女だったのだ。

（あいつも……………、異世界もいろいろあるんだな）

銀時は窓の淵に腰かけながら、ベッドの方を振り向き、再びルイズを眺めながらそんなことを思った。

夜風が一陣部屋を駆け抜けた。

「俺が来た理由……………か」

ふと、銀時がそんなことを呟いた。

その時……………

『お前にゃ、何も護れやしねえよ』

「！？」

呟いた瞬間だった。銀時の中で、何かがそんなこと呟いた。

さっきの走馬灯とは違う。明らかに、銀時の中にいる『何か』が発した『声』であった。

瞬間。まるで、胃に氷の塊でも押し込まれたかのようにゾクリとした寒気を感じる銀時。

窓の淵になんとか手をついて、体勢を保ったが、一瞬かなりヤバかった。

(クソッ……………またか)

銀時は荒く息を吐き、その『幻聴』が消えるのを待つと、また心の中で悪態をついた。

今度はより激しく、弱弱しい悪態を。

銀時の視線が再びルイズを捕える。規則正しく上下する布団を見て、銀時は安堵の溜息をついた。

「……………って……………どんだけカッコ悪いんだ俺は」

そんな自分に気がついて、銀時はまた舌打ちした。

銀時はまた再びルイズに近づいた。再び、その寝顔を視界に収める。

こうして見ると、本当に貧弱そうな少女である。それこそ、吹けば飛びそうなほどに、細い体の線だ。

『お前にゃ、何も、何も護れやしない』

再び小さく心の中で、『声』が聞こえた気がした。

「……………上等だ、クソが」

しかし、銀時は今度はうろたえない。決然とした目で、ルイズを

見下ろし続けている。

「腹ぁ……………括ってやんよ……………ッ！」

そして、銀時は月明かりに照らされた部屋のもと、静かに決意した。

第3話：覚醒幻夢（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 本当は銀魂みたいに笑えていい話が書ければ最高なんだけど………難しいです。

感想、意見お待ちしております。

第4話：武士乃契（前書き）

第4話です。

ああ、これは銀さんなのか……

第4話：武士乃契

朝。ルイズは窓から差し込む眩しい日の光で目が覚めた。

「ん、ん~~~~~………」

あまり朝が強くないルイズ。のっそりと起き上りながら、しよぼしよぼする目をこすり、盛大に欠伸をした。

「……………ん？」

そこで、初めてルイズは自分がいつものネグリジェ姿ではなく、白のブラウス、黒のプリーツスカートという制服姿であることに気が付いた。

「！」

途端に、昨日のことが思い起こされる。

使い魔召喚の儀式。成功したと思ったら、呼び出されたのは死んだ魚のような目をした平民の剣士。

しかも、その剣士は自分の使い魔になることを拒否し、挙句の果てには、自分に向かって、人としても考えられないような暴言を浴びせかけてきた。

今まで、いい記憶というのがあまりないルイズの人生の中でも、類をみないほどの最悪最低の記憶。

それを思い出し、ルイズは歯が砕けるんじゃないかと思うほど、強く歯噛みした。

「あんの、平民~~~~ッ！」

およそ少女が吐くとは思えないほど呪詛の念を体中から放出しながら、ルイズはグルンと部屋を見回した。

しかし……………、その平民は姿形すらルイズの視界には映らなかった。

「……………どこに行った？」

一瞬目的の人物が見つからず、思考が止まる人物。

しかし、次の瞬間には、その目は狩人の目になり、素早くベッドから降りると、いつの間にか握りしめていた（というか、昨晩から握りしめていた）杖を構え、扉の方へ迷わず向かって行った。

その表情は憤怒に染まりきり、見つけたらすぐさま吹き飛ばしてやると言わんばかりの闘志が溢れでている。

「絶対に、逃がさないんだから……………ッ!!！」

そして、その手がドアノブにかけられようとした、その時だった……………

「おい、起きてるか〜いっ」と

「うにゃ!？」

突然扉が開かれ、ルイズの顔面に扉がぶち当たった。

「んお？なんだ、起きてたか……って、大丈夫か？」

思わず鼻を押さえてうずくまるルイズ。と、その頭上から、そんな呑気な声がかけられた。

そのイラつく思いっきり聞き覚えのある低い声に反応して、ルイズは鼻を押さえたままガバツとそちらを振り返った。

そこには………案の定、昨日の通り死んだ魚のような目で自分を見下ろす、あの白い無礼者の平民がいた。

（……ッ！！コイツ………ッ！！）

それを認識した瞬間。ルイズは、鼻の痛みも忘れて杖を拾い上げ、必殺の呪文を唱えようとした。

しかし………

「あゝ、待て待て！落ち着け！このマントがどうなってもいいのか！？」

それは突然視界を遮った黒い布によって、遮られることとなった。

「ぬあ！？な、何！？」

ルイズが突然登場したそれを手をバタバタさせながら、どこそうともがいた。

それを見て、銀時は「おっと」と言って、ルイズから一度それを離した。

それにより、再びルイズの視界に銀時が映り込む。その手に持つ恐らく自分のマントを持ったソイツが。

「あ、あんた何して……………」

それを見たルイズ。一瞬なんだか分かっていないようだったが、それが自分の物だと分かったと、少し氣勢が削がれたのか、唱えていた呪文を中断して訝しげに銀時を睨み始めた。

杖先は、そのままではあるが。

と、銀時は、ルイズが一応止まったのを確認したのだろう。ホー
ルドアップの体勢を元に戻して、ルイズに答えた。

「いや、何って……………、洗濯だよ洗濯」

「……………は？」

少しバツが悪そうに言った銀時に、ルイズは思わず目を点にした。
しかし、銀時はそんな反応を予想していたのか、そのまま言葉を続けた。

「いや、だからな。これ、お前の外套？結構、埃っぽかったから、ちょっと洗ってきたんだよ。ああ、安心しろ、かなり早いうち……………
……………ていうか、ほとんど夜中から洗ったから、もうすっかり乾いてる。本当は、お前の制服？も洗いたかったんだが、さすがにな……………」

：脱がすわけにもいかねえから、とりあえず濡れ布巾とタライ持って来てやった。顔洗うだろ？」

そんなことを言いながら、銀時は持っていたマントを椅子にかけ、いつの間にか持っていたタライを示しながら、銀時はルイズにタオルを手渡した。

流れるような一連の動作。ルイズはその間、ずっと目を点にして眺めていたが、自分の前にタオルが差し出された段階でようやく回復し、困惑した声で

「あ、あんた何やって……………ていうか何で？」

そう銀時に質問した。

そう聞かれると銀時は、少し顔を赤くして

「あゝ、なんだ。もちろん、これでお前の機嫌が直るなんて思っちゃいねえが、昨日は俺も大人げなかったっーか、混乱してたっーか……………」

ボソボソとそんなことを言い出し

「あゝもゝ、やっぱダメだ。俺ホントこういうのダメだ。だから単刀直入に言う！お前の使い魔になってやる！！」

最後にはボリボリと髪をかきむしり、何かを決意したかと思うと、急にルイズの顔を正面から見据えてそう言ってきた。

「……………はえ？」

そんな銀時を見て、ルイズは思わずそんな間抜けな声を出してしまうが、すぐにその意味を理解すると

「は、はぁ！？ あんた、あんた今さら何言って……………！！ 昨日あれだけ私を侮辱しておきながら、一晚経ったら、手のひら返して、そんな……………、私をバカにするのも大概にしてよッ！！！」

顔を真っ赤にさせながら、容赦なく銀時の顔面を張り倒した。

乾いた音が部屋中に響き渡った。

しかし、銀時はそれを予想していたのか

「イッテェ……………！ クソ、やっぱ容赦ねえな！？ まあ、無理もねえけど……………」

はられた頬をさすりながら、苦笑いを浮かべた。

「……………ッ！！」

ルイズはその表情を見て、さらにバカにされたと思ったのだろう。

今度は逆の頬をはたく為に、再び腕を振り上げた。

しかし……………

「でもな……………」

ガシッと、その腕はあっさり銀時に受け止められた。

銀時はそのまま真っ直ぐにルイズを見据えると

「一晩でも一応考えたんだ。話だけでも聞いちゃくれねえか？」

そうルイズに頼んだ。

ルイズは、銀時のその普通とは違う様子に思わず動きを止めてしまふ。

それを確認したのか、銀時は再び話し始めた。

「……………ルイズ、俺は多分異世界から来た」

それから、銀時は全部を話した。

自分の世界のこと。魔法という、力がない異世界のこと。突然、襲いかかってきた天人のこと。

そして、自分がそこで剣を取り、天人相手に戦っていたこと。そして……………それに負け、その瞬間にこっちへ連れてこられたこと。

「ルイズ、俺には帰るところがないんだよ。どこにもな……………。一晩考えて、それに気が付いた。バカだろ？でも、そうなんだ。俺には行くところがない。だから、お前の使い魔にならせてくれ」

全てを語り終えた後、銀時はそう締めくくり、再び頭を下げた。

ルイズはその間中ずっと黙っていた。

ハッキリ言って、到底信じられる話ではない。異世界も、ましてや空の彼方と異形の存在など認められる訳がない。しかし、ルイズはそれを口にすることが出来なかった。

なぜなら、銀時の目があまりに真剣だったから。到底嘘についているように見えなかったから。

しかし……………それでもルイズは素直にはいそうですかと言え
るような少女では無かった。

「な、何よそれ！そんな話信じられる訳ないじゃない！！異世界だ
なんて……………。そ、それに！その話からすると、アンタ妥協し
て、仕方なく私の使い魔になるってことでしょ！？冗談じゃないわ
！！アンタやっぱり私のことバカにしてる！！バカにしてるわ！！
！」

ルイズは銀時の手を振りほどくと、やはり顔を真っ赤にしながら、
銀時を責め立てた。

銀時はそんなルイズの言葉を黙って聞いていたが、やがて静かに
口を開いた。

「……………ああ、そうだな。妥協だコレは。でもな、ルイ
ズよく聞け。少なくとも俺は、男はな、それだけで頭を下げたりな
んかしねえよ」

「……………え？」

銀時の言葉に、思わずそんな声が出るルイズ。銀時はそんなルイズに構わず膝を折ると、正座の形でルイズに向かい合った。

「ルイズ、俺はお前を護ると決めたから、頭を下げるんだ。だから、ルイズお前は俺の寄る辺になってくれ」

「！！」

ルイズは思わず息をのんだ。そこにかしずいているのが、昨日の無礼な平民だとは思えなかったからだ。

そこにいたのは、まるで騎士。主人を命の限り護ると誓う一人の騎士のようであった。

（な、なんで………そこまで）

思わず見入られそうになる目を見ながら、ルイズは無意識にそんなことを考えてしまう。

しかし………

「……………まあ、断られても他に行くともねえからな。勝手に居座らせてもらうぞ」

それは、さっきまでの真剣さが嘘だったようにニタリとした笑みを浮かべた銀時に中断させられることになった。

「（ガクッ）あ、あんたねえ〜！」

ルイズはフルフルと声を震わせて、杖を握りしめるが、さずがに

もうバカらしくなったのだろう。

「……………ハア、行くわよ」

クルリと銀時に背を向けると、スタスタと扉の方へ歩き出した。

「? どこへだ?」

銀時がその背を追って立ち上がる。ルイズがそれに振り返り

「朝食に決まってるでしょ!」

威勢よく銀時に言い放った。

こうして、銀時は、白夜又は異世界で生きていく覚悟を決める。

その先にあるのは果たして何なのか? 次回を待て!!

「朝食? ああ、そりゃあ俺としては、いいんだが…………、お前そのカッコで行くのか? シワ寄りすぎて柄みたいになってんぞ?」

「あんたはどうしてそう締まらないのかしらねえ!!?」

第4話：武士乃契（後書き）

いかがでしたでしょうか？

もう、銀さんが美化されまくってる気がします、もうどうにも止まらない！

頑張れ自分！もっと心を下汚くするんだ！！

第5話：学院初日（前書き）

第5話です。今回は、あのフェロモンビューティーの登場です。

第5話：学院初日

前回のあらすじ！

「はあ、もう！アンタが朝っぱらから、変なこと言い出すから、朝食に遅れちゃうじゃない！！」

「いや、変なことって………、俺としては、もう考えられないくらいシリアスな場面だったんだが」

「それに、異世界って何！？子供でももっとマシな嘘つくわッ！！」

「聞いちゃいねえ………、っていうか、まだ信じてなかったのかよ」

「当たり前でしょ？証拠もないのに、そんな………」

「証拠？なんだ、そんなことか。それならないこともないぞ」

「え？あるの？だったら早く言いなさいよ」

「ああ、ちょっと待ってろ。今俺が、天人会話術、略して天会話で磨き上げた爆笑必至のスペース・ジョークを………」

「そういうのは証拠って言うんじゃないわよ！！…っていうか、天会話って何！？」

あの後、ルイズは銀時にツッコまれた事あってか（本人は絶対に認めないだろうが）、本来は銀時に頼むはずの着替えを、うっかり自分で済ませてしまうほどにあせって仕度をし、部屋を飛び出した。

銀時は、そんな昨夜の涙が嘘のように騒がしいルイズを見ると、苦笑いを浮かべ、その後が続いて行った。

トリステイン魔法学院の食堂――『アルヴィーズの食堂』は、学院の真ん中にそびえ立つ一番大きな本塔にある。

そこには、すでに生徒、教師、合わせて100名以上が集まっており、それが3つ並べられた長いテーブルブルにビッシリと着席していた。

壁や天井には、これでもかと装飾が施されており、天窓からは朝の眩しい陽光が降り注いでいた。

見ると、ロウソク立てにまで、その意匠はふんだん無く使われており、テーブルに並ぶ食事はフルコースのディナーと見まがうような御馳走ばかり。

そんなところに踏み入った銀時は思わず、ポカンと口を開けてしまった。

しかし、急いでいたルイズはそんな銀時の様子には気がつかず、付いてこない銀時を急かしてさっさと開いている席へと歩いて行った。

(……………やっぱ基本的にクソ生意気だな、アイツ)

そして、急かされた銀時は、昨日の夜のことを思い出しながらも、ルイズの基本的な性格をそう断定した。

席につくとルイズは、「椅子を引いて」と銀時に上から目線で指示し、銀時も「へいへい」と軽く返事しながら、一応それに従った。

ルイズは何も言わずそこに座り、銀時も特に気にすることもなく隣に座った。

と、その時だった……………

「……………ちょっと」

「んあ？」

銀時が席に座ると同時に、ルイズが何か押し殺したような声を出

しながら、銀時の肩を叩いてきた。

銀時がそれに振り返ると、そこには何故か眉を吊り上げながら、床を指差しているルイズがいた。

「？」

銀時は首を傾げながら、それに従って視線を下げた。そこには……

「……………皿だな？」

なんか所々欠けたところが目立つ汚らしい小皿が、ポツンと置かれていた。

そこまで、銀時が確認するとルイズは、おもむろに口を開いた。

「……………あのね？ここは、貴族の席なの。平民は座っちゃダメ。だから、あんたは床で食べて」

「……………は？」

銀時は一瞬言われた意味が分からず、思わず目を点にした。

しかし、ルイズはずっと床の皿を指したポーズで固まったまま動かず、どころか次第にイラついた表情になりつつあった。

どうやら、マジらしかった……………

しかし、そこは往生際の悪さでは少年誌主人公一を誇るであろう

銀魂の主人公になる男である。

どこかの流されるままに、下僕生活を送るドM一般人とは根本的に違うのだ。

銀時は、額に大量の汗を垂らしながらではあるが、再びゆっくりと顔をルイズに向けると交渉を開始した。

「……………あ、あの〜ルイズさん？一応確かに、俺はお前に従う……………っていうか使い魔になることは了承したんだけど……………いや、したからこそ、この仕打ちはあんまりなんじゃないのかなあ？」

とりあえず、銀時も形はルイズに服従する身である。ジャブとして、比較的やんわりと抗議の声をルイズに投げかける。

しかし……………

「はあ？何言ってるのよ、アンタ。本来使い魔は外の小屋で食事をとるものなのよ？それを私が特別な計らいで、この食堂に入れてあげてるの。むしろ、感謝してもいいくらいなんだから」

どうやら、この少女は性根から、貴族というものに染まりきっているらしい。銀時がせっかく原作からは考えられないような下手な態度で接しているのをいいことに、完全に見下した態度で銀時の抗議を突っぱねてきた。

銀時の額にハッキリと青筋が浮かんだ。

「いやいやいやいや、何言ってるの？どう考えてもおかしいでしょうが！徳川綱吉だって、もうちょい人に優しいぞ！？」

「誰よッ！？トクガワツナヨシって！！？」

※ 徳川綱吉とは、江戸幕府の第五代将軍であり、1687年に生類憐みの令という、田畑を荒らす野良犬ですら手を出したらダメという悪法を生み出した、ワンマン過激派動物愛護団体みたいな人である。

「————っという人だ！」

「説明しなきゃ、ツツコめないようなネタを出すなッ！！！」

「おいおい、その辺はお前察しろよ。俺達コンビだろ！！！」

「誰がだ！！いい加減、ぶっ飛ばすわよ、アンタ！！！」

「お前、さみしいこと言うなよ！！！ていうか、もうハッキリ言って、腹減ったんだよ、俺は！！！昨日から何も食べてねえんだぞ！！？俺一応成人男性だよ！！？」

「私だって、減ってるわよ！！！アンタがごちゃごちゃ横から言うから、進まないいでしょうが！！！」

「だあゝかあゝらあゝ！！これじゃ足りねえって言ってんだよ！！！お前こんなしよぼくれた朝飯じゃ、徳川家康でも四国の一つも制圧

できないよ!!?」

「トクガワナントカはもういいいいいいいいいい!!!」

壮絶な舌戦?の末。とうとうルイズは髪をかきむしりながら絶叫した。

で……………

ボガアアアアンツ!!!

結局、銀時はそのまま食堂で騒ぎまくったことにより、再び顔面にルイズの爆発をまともに受けてしまい、食堂の外へと放り出されてしまったのだった。

「あゝ、腹へったあゝ……………、こんなじゃ、もたねえよマジで」

で、その後銀時とルイズは、食堂の外でのびていた銀時をルイズが蹴り起こして、反抗しそうな銀時をルイズが杖を持って黙らせた後、2人で中庭に来ていた。

というのも、今日は二年生の授業はお休みであり、自分の使い魔との交流を深めるお茶会を中庭でやっていたためであった。

「ちょっと、情けない声出さないでよ！ 恥ずかしいわね！！ もっとシャンと出来ないの！？」

そんな理由で中庭の入り口までやってきたルイズと銀時。

すると、今までフラフラと自分の後を追いつ、ブツブツと文句を言いつながら付いてきていた銀時にいい加減イラついたのか、ルイズが突然振り返って銀時を叱りつけた。

しかし、銀時はもちろん好きでこんな瀕死状態になっているのではない。

目の前の高慢ちきな自分のご主人さまのせいでこんなことになっているのだ。

「はぁ、あのな、俺だって一応人間なんだよ。顔面爆破されりゃあ、そりゃ元気もなくなるわ」

しかし、声をあげて怒る元気ももうないのだろう。銀時は、ダルそうに自分を睨みつけるルイズにそう言うのと、ことさらわざとらしく溜息を吐いて見せた。

「ぐっ……………、そ、それはアンタが……………！」

そんな態度をとられたルイズ。思わず、再び舌戦を始めてしまいそうになるが、食堂での件を思い出したのだろう。

出かかった言葉を、無理やり喉の奥に詰めると、フンと鼻を鳴らして、銀時から目をそらした。

「(何よ……………、朝はあんなこと言ったくせに……………)」

まあ、その代り小さく別の文句が、口について出てしまったが。

そんな時だった……………

「あら？ ルイズじゃない？」

銀時とルイズの背後から、ふとそんな声がかかった。

「ん？」

「げ……………」

その声に、銀時は無表情に、ルイズはことさら不愉快そうな顔をしながら振り返った。

そこには……………

「はぁーい♪」

ルイズと対局の位置にありそうな、赤毛のグラマラスな褐色美少女がいた。

「……………キュルケ」

ルイズはそのグラマラス少女——キュルケを見ると、嫌な顔を隠そうともせず、その名前を言った。

「あら？なんだか、ご機嫌ナナメね？ひよつとして、そちらの使い魔さんのことでお悩み？」

しかし、そんな態度をとられたキュルケは、もう馴れたものなのか特に気にすることもなく、ルイズにヘラヘラと笑いかけてきた。

それによって、余計にルイズが苦虫をかみつぶしたような表情になるが、気にした様子はない（むしろ、面白がっているように見える）。

（……………なんか、また面倒くさそうなのが来たな）

そんなルイズの様子を見たからだろうか。銀時もまた、ルイズとは違う理由ではあるが、顔をしかめた。

キュルケは、そんな二人の表情を面白そうに眺めながら、今度は視線を銀時の方に移してきた。

顔が近付いて思わずのけぞる銀時。

しかし、キュルケはお構いなく銀時を眺めまわし……………

「ふーん、本当にただの平民……………、いや平民の傭兵さん？ みたいね。顔は……………なんだか、死んだ魚みたいな目してるわね」

本人の目の前でそんな感想を言ってきた。

「余計なお世話よッ！」

それにルイズが声をあげて、キュルケを睨みつけた。

しかし、キュルケはやっぱり「はいはい」と適当に返事をしながら、余裕たっぷりに銀時との会話を続けた。

「あなた、お名前は？」

「人に面と向かって、目が死んでるって言うときながらか普通に聞くか……………、まあいざというときは、煌めくからいいけど。あと、人に名前聞く時は、自分から名乗れて母ちゃんから教わらなかったか？ 姉ちゃん」

「！……………ふふ、面白い傭兵さんね。失礼したわ。私は、このトリステインの東の隣国、ゲルマニアのツェルプストー家が長女、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ。よろしく、真っ白な平民の傭兵さん？」

「相変わらず長いな……………まあいい。俺は、坂田銀時だ。名前が、銀時。まあ、好きに呼んでくれや」

「サカタギントキ？ 変わった名前ね……………。うん、まあいいか。じゃあ、よろしくギントキ？」

「ああ………つつても、頼むからいきなり顔面に爆発は止めてくれよ」

キュルケは銀時と自己紹介を終えると、一瞬首を傾げたが、あとは気さくに銀時にほほ笑んだ。

普通の男子ならば、ここで頬の一つでも染めるのかもしれないが、生憎銀時は普通じゃない。

キュルケの頬笑みにも、変わらぬ死んだような魚の目で応対した。

「アンタも余計なこと言うなッ!!」

その後で、ルイズに強かにローキックをお見舞いされたが。

「……………で？アンタはまだ何か用があるの？私も忙しいんだけど」

銀時にローキックを加え、それにより銀時が地に伏して悶絶し始めたのを見て、ようやく一段落がついたルイズはキュルケに振り返りながら、心底不機嫌な声でそう言った。

「あははははははははは！え？」

しかし、キュルケはルイズと銀時のコントのようなやりとりを間近で見っていた為に、腹を抱えて笑いこけていた。

「何笑ってんのよ、アンタ!!はしたないわよ!!!」

それを見たルイズは、瞬時に顔を赤く染めると、キュルケに向けてキャンキャン吠え始めた。

それを受けて、キュルケはようやく笑いが治まったのか、涙目になりながらも、ルイズに「ごめんごめん」と謝り、息を整えた。

「あはは、いやゝ笑ったわ。こんなに笑ったのは久しぶりかも。おっと、ゴメンゴメン悪いつもりで言っただけは無かったのよ。ただ、純粹に楽しかったの」

「ふん!見世物じゃないのよ!!」

ルイズはキュルケの謝罪にもプクーっとなら顔を膨らませただけであった。

キュルケはそんなルイズを内心カワイイやつと思ったが、もちろん口には出さなかった。

「ふふ、本当に釣れない子ね。せっかく、私も使い魔を紹介しようと思ったのに」

「? あんたの使い魔?」

だから、キュルケは別の話題でルイズを釣ることにする。

基本的に、根っこは素直なルイズ。必ず引っかかるだろうとキュルケは自分の背後に、声をかけながら考えた。

案の定、キュルケの背後から出てきた巨大な影にルイズは一瞬にして目を奪われた。

「それ、サラマンダー？」

思わず声に出してしまう。

そう、キュルケの背後から出てきたのは、セントバーナードほどの大きさもある巨大な火トカゲであったのだ。

「お？なんだ？ポ○モン？」

いつの間にか復活して、ルイズの隣に立っていた銀時も、思わず目を見開く。

上々の二人の反応にキュルケは満足そうに微笑んだ。

「ふふ、そうよ、この子は火竜山脈のサラマンダー。どう？立派でしょ？見てよ、この尻尾の炎の鮮やかさ！好事家に見せたら値段なんて付けられないわよ！」

そして、得意そうにその巨大な胸を張ってみせる。やはり、キュルケも基本的に貴族なのだろう。こういう自慢癖が少なからずあるらしかった。

（へー、そんなスゲーのか……、売れば少しはこの生活からも解放されるかもな）

しかし、銀時はそんな説明を聞きながら、内心でそんなことを考えていた。基本的に、汚い男であるのだコイツは。

「へー………ハッ!? コ、コホン! ま、まあ、いいんじゃない?
? アンタ火属性だものね」

と、ルイズも途中まではその説明に頷いていたが、途中で我に返ったのか、フンとそのサラマンダーから目を逸らした。

しかし、それはやはりどう見ても虚勢であり、キュルケはますます調子に乗った。

「そう、私の二つ名は『微熱』。ささやかに燃えるのは情熱。でも、男の子にはそれだけで十分なのよ♪」

「ッ! ふん! 何が、ささやかよ! ただの盛りのついた雌じゃない!
」

「あら? ルイズ、今何か負け惜しみが聞こえた気がするわ」

「気のせいじゃないかしらねッ!?!?」

ルイズ。今日のところは、完敗であるようだった。

(……………コイツもやっぱ女なんだなあ)

そして、銀時はそんな醜い戦いを見ながら、そんなことをボーッと考えていた。

「ふふふ、ごめん遊ばせ。でも、ルイズ？あなたの使い魔も十分素敵だと私は思うわ」

と、そんな風に完膚なきまでにルイズの優位に立ったキュルケは、最後にそんなこと言い出した。

「な、何ですって！？」

ルイズはそれをバカにされたと思ったのだろう。悔しげに歪んでいた顔を、さらに歪ませながらキュルケに噛みついた。

しかし、キュルケはそれに構わず言葉を続ける。

「だって、あなたの使い魔って、とっても面白いわ。そうでしょ？平民なのに、貴族とこんなに物おじしないで話せるなんて、そうそう出来ることじゃないわ」

「そ、それは、コイツが無神経なバカだから――」

「だと、してもよ。私は、彼みたいなお茶のみ友達がいたら、それは毎日が楽しくなると思わ」

「は！？アンタ、平民に何言ってるのよ！？」

「ふふ、そのままの意味よ？」

そう締めくくって、妖艶に笑うキュルケ。

それは、いつものバカにした笑いではなく、なんだか今のルイズ

にはよく分からない意味が込められた笑顔だった。

「それじゃ、私は席に戻るわ。おいで、フレイム」

そんな風に、ルイズを混乱の中に放り投げてしまったキュルケは、そのままさっさと立ち上がると、ル横に巨大な火トカゲを従えて、中庭の生徒の輪の中に消えて行った。

「な、何なのあの女……………気味が悪いわ」

ルイズはその後ろ姿を仮装した母親でも見るかのような目で見送った。

「……………なんかもう俺ひたすら笑われてた気がするんだけど」

そして、銀時も。結局、話の中心には最後まで入れず、ひたすらネタにされ続けたことを、今さらながら虚しく感じるのであった。

第5話：学院初日（後書き）

いかがでしたでしょうか？感想、意見お待ちしております。

第6話：中庭乃宴（前書き）

第6話です。今回は、少し駆け足気味？

第6話：中庭乃宴

トリステイン魔法学院の図書館は、食堂がある本塔の中にある。

その規模はとても巨大であり、10マイル程もある本棚が立ち並びその様は正に壮観と呼ぶにふさわしい。

蔵書の数も、その規模に比例して非常に、というか異常に多く、なんと最古の物はこのハルケギニアで神とさえ崇められる始祖ブリミルが新天地を築いたとされる時期のものまであるのだ。

そんな図書館である。中には一般的に読む機会さえない、見ることすら叶わない禁書と呼ばれるような類の本も存在している。

そんな本を集めた一角、教師のみに閲覧が許可されている封鎖領域、それが『フェニアのライブラリー』である。

「……………」　　パラパラ

そんな学院でも、日の光のもとには決してさらせない影の領域。

そんなある意味痛いほどの沈黙の中に、その人はいた。

ゆったりとしたローブに、どこかくたびれた雰囲気のあるシワのある顔、そして禿げあがった頭。

そう、銀時がこの世界に召喚された時に、あの儀式の監督官をしていたコルベール先生である。

「……………」　パラパラ……………」

コルベール先生は、今普段のしよぼくれた雰囲気が嘘のような真剣な目つきで分厚く、とても古い本をめくっている。

その様子は、普段とのギャップも相まって少し怖いくらいであった。

どうして、そんな鬼気迫る勢いでページをめくっているのか？

それは、他ならぬ前回の使い魔召喚の儀式、正確にはその時刻まれた銀時の左手のルーンが原因であった。

コルベール先生は、この学院に務めて20年になるベテランの教師である。その間に、もちろん毎年ではないが、何十人、何百人もの生徒達の使い魔召喚の儀式の監督官を務めてきていた。

コルベール先生は、かなり教育、というか研究熱心な教師であり、そんなたくさんの生徒達が召喚した使い魔のルーンを粗方全て記憶しているのだ。

と言っても、ルーンの形の違いは、四角か三角かの違いくらいでほとんどそれが変わることはないのだが。

しかし、先日銀時が気絶している間にスケッチしたルーンは、そのどれとも決定的に違ったのだ。

というか、そもそも簡単な印程度の役割のはずの使い魔のルーンが、何か意味を持っていそうな文字列として浮かび上がったのだ。

そんなことがあっては、もともと好奇心の塊のようなコルベール先生である。調べないわけがない。

かくして、コルベール先生は、あの後すぐさま図書館に飛び込み、こうして生徒閲覧禁止の本まで引っ張り出して、睨みつけるまでに没頭しているのであった。

彼が今開いているのは、始祖ブリミルが使役したとされる使い魔を記したとされる本である。

伝説を示した、言わばバカげたお伽噺の領域の文献。まともに、今を生きている人間であれば、考古学者でもなければ開かないような本である。

しかし、彼はそのお伽噺の中から、答えを見つけてしまったのだ。

「……………！こ、これは……………！？」

あるページを開いて、見つけたマークにコルベール先生は目を見開いた。

さらに、そのページを読み進めていくうちに、驚愕の色は彼の顔全体に広がっていく。

「た、大変だ……………！！！」

そして、そのままコルベール先生は、ガタリと音を鳴らしながら席を立つと、そのまま血相を変えて、図書館を飛び出して行った。

ようやく、中庭までたどり着くことが出来た銀時とルイズ。

中庭には、すでにほとんど全ての生徒が集まっているらしく、みんな思い思いのテーブルに腰かけながら、友人と談笑をしていた。

その傍らには当然使い魔も控えており、さながらそこは動物園のふれあい広場のようであった。

（まあ、行ったことねえし、こんなビックリ博覧会………いや、えいりあんがいるか）

そんな光景を見ながら、銀時はふとそんなことを思った。

「ちょっと、何してるの？ボーツとして」

そんなことを考えていたからだろうか。銀時は、ルイズがすでにさっさとテーブルに向っていることに気がつかずにいたらしかった。

自分の前で、白いイスを前に腕を組んでいるルイズが銀時を睨みつけていた。

銀時は慌ててそこに行き、イスを引いてやる。

「ああ、へいへい……それくらい自分でうっかり座っちゃえばいいのに、意外と律儀なのか？」

その時についてうっかりそんなことを言ってしまうが、ルイズは「使い魔がいちいちブツブツ喋らないで」&only said「ただ言っ、さっさと座ってしまった。」

「……………お前、友達いねえだろ」

そんな態度で接せられた銀時。反撃にとそんなことをポツリとこぼす。

ルイズはギロリと銀時を睨みあげたが、銀時は瞬時にそっぽを向くことで回避した。

と、その時だった。

銀時はふと自分に向けられる視線に気がついた。

ちなみに、銀時はこの世界に来てから、ずっと周りから蔑みの視線を向けられているが、それは全て無視している。地の分ですら、それは書いていない。

だから、視線がその類のものだったら、気にすることもない。

しかし、今の視線は少し今までとは毛色が違った。

そう、例えるなら“観察されている”。

自分に対する先入観もなく、しかし、興味がないわけでもない。

本当に冷静な科学者のような視線。

そんな感じがする視線が、自分に注がれていることを銀時は気がついた。

「……………」

さりげなく辺りを探ってみる銀時。

周りの何人かの、自分を蔑んでいたバカと目があったが気にしない。

その中の異質を探ってみる。いない。

では、もう少し離れてる？

さらに、探りを入れる。今度は、テーブルの先。中庭を囲う塀の傍……………」

と、そこで

「……………」 ジィ〜〜〜〜

「……………」

なんか自分のことをガン見しているドデカイ奴——いわゆるドラゴンという奴と目があつた。

(……………ガチのファンタジーだ)

今まで散々意味不明な生物を見て、体勢が出来ていた銀時も、さすがに思わず口をポカンと開いてしまった。

そんな銀時の内心を知ってか知らずか、今まで銀時をガン見していたドラゴンはそれから急に銀時から目を離すと、今度は自分の足元にしきりに合図を送り始めた。

「？」

首を傾げる銀時。気になって、その視線を追って少し身を乗り出す。

そこには……………

「……………」 ジィ~~~~~

「……………」

巨大な竜のぶつとい足にもたれかかるようにして、こちらを本越しに見つめてくる青い髪のメガネ少女がいた。

「……………長門さん？」

ほぼ無意識レベルで銀時は呟いてしまっていた。

「アンタ何言ってるの？」

と、そこで。一人黙って、紅茶とケーキを楽しんでいたルイズがツツコみを入れてきた。

「へ？ああ、いや、何でもない。突然電波が……………」

「デンパ？」

その声で我に帰る銀時。ルイズにいつも通り訳の分からないことを言っでごまかすが、実際今のはヤバかった。実名だもの。

ルイズは首を傾げたが、いつもこんなもんかと納得して、再び紅茶を啜ろうとした。

と……………」

「む、紅茶が……………、ねえ、ちょっと、お茶が切れたわ。入れてきて」

飲んでいた紅茶が空になっていることに気がついたルイズ。

未だ微妙にさっきのメガネが気になって、そっちをうかがっていた銀時にズイツとカップを差し出した。

突然カップを目の前に差し出された銀時は、一瞬面喰うが、すぐにルイズとカップを交互に見ると理解したのか、それを受け取った。

「へ？あ、ああ。お茶ね……………、いいけど、どこで？」

「それくらい自分で考えなさい！あと、ケーキももう一つ欲しいわ。できれば、クックベリーパイ」

「……………太るぞ？」

「いいから、さっさと行けバカ犬ッ！！」

真っ赤になったルイズを、銀時は「へいへい」と軽くかわしながらいなす。

ついでにポットと空の皿も回収させられながら、銀時はルイズの席を離れた。

その時、ついでに、さっきのドラゴンとメガネに目線を送ったが、メガネはすでにその意識を本に移しており、ドラゴンは何故か頭をさすりながら、恨めしげにメガネに向かって「きゅいきゅい」吠えていた。

（……………なんだったんだ？）

銀時は首を傾げたが、とりあえず保留にしておくことにした。

それから、銀時はとりあえずお茶が入れれそうな場所が無いか見回してみたが、どうにも見つからない。

何かワゴンのようなものが視界の端に映ったのを記憶していたが、

今はそれも無かった。

（入れなおしてんのか？）

そんなことを思い、それだとするとどうやら自分はこの中庭の外までお茶を汲みに行かねばならないという面倒な事態に陥ってしまうという考えに至る銀時。

（はあ……………面倒くせえ）

思わず内心で溜息をついた。

かと言って、手ぶらで戻る訳にも行かない。

どうしたもんかと、開いた席の冷めた紅茶でも持って行ってごまかそうかという不遜な考えまで浮かぶようになり始めた。

その時だった。

「あの……………、すいません」

背後から、ここ数日……………いや、もしかしたら何か月か聞いたことがないような、控え目な声が銀時にかかった。

「あん？」

銀時が振り返るとそこには、この世界に来てからは、そう言えば初めてお目にかかる黒髪をした、素朴な感じするメイドさんがいた。

（日本人……………？）

その少女を見た瞬間。銀時は、一瞬そう感じてしまったが、すぐにそんなわけないと頭を振った。

「どうかなさいましたか？」

すると、そんな銀時の様子を心配したのか、黒髪メイドさんが銀時の顔を覗き込んできた。

「え？ ああ、いや、なんでもねえよ」

その声に銀時は、しまったと思いながら、すぐにごまかした。

メイドさんは首を傾げていたが、大丈夫だと分かるとすぐにホッとしたように笑顔になった。

どうやら、とてもいい人のようだ。

（おお、ここに来てからの初めての好感触だ）

銀時はそのことに心の中で密かに感動してしまう。

だからだろう。口について出てくる言葉も、無意識に柔らかいものになっていた。

「いや、悪いな心配かけて。ところで、何か用か？」

そう言って、銀時は微笑む。考えて見れば、人にこうやって素直に微笑むのは久しぶりの気がする。もちろん、それは前の世界のことも含めて……………

メイドさんもそんな銀時に微笑み返しながら、丁寧に戻して来てくれた。

「あ、そうですか、よかった。あ、用って言うのは、それほどでもないんですけど、なんだかキョロキョロしてて、困っていたようでしたから……………」

どうやら、このメイドさんは挙動不審の銀時を心配して、声をかけてくれたようだった。

ますます、好感が持てるメイドさんである。

「そうか、いや、ありがとう。ちょっと、ウチのお嬢様にパシラされてね。お茶入れるとこ探してたんだ」

そんなメイドさんに銀時も、つい軽い感じで応対してしまう。

しかし……………

「……………お嬢様？」

銀時が何気なく言った言葉に、メイドさんは首をひねり、ついで、銀時の左手にあるルーンの紋章に気がついた。

「あの……………もしかして、アナタはミス・ヴァリエールの使い魔の方ですか？」

「は？ ああ、紋章コイツか……………」

突然言い当てられた自分の身分に、銀時は一瞬驚いてしまうが、すぐに自分の左手の紋章に気が付くと納得した。

「ああ、やっぱりそうだったんですね。噂通りです。本当に、人間が使い魔召喚儀式で召喚されるなんて……………」

銀時が頷くと、メイドさんは今度は驚いたように目を見開き、マジマジと銀時を見始めてしまった。

「あゝっと、やっぱり、そんな珍しいか？」

そんな視線が居心地悪かったのか、銀時は苦笑しながらメイドさんに問いかけた。

「え？ あ、いえ！ 申し訳ありません！ その……………ここに、奉公に出させていただいてから、しばらく経ちますが、そんな話聞いたことが無くて……………」

すると、メイドさんはこっちが申し訳なくなるぐらい、慌てて頭を下げて始めてしまった。

銀時は、それを見て不謹慎ながらも「あゝ、いじめてゝ」とか、思ってしまった。

「はは、やっぱりそうなんだ……………まあ、俺みたいのがゴロゴロいたら、それこそクーデターでも起こるわなゝ」

しかし、さすがの銀時も初対面、しかも異世界に来て初めてまともに優しくしてくれた少女に、そんな自分の性癖を明かせるわけがない。

適当なジョークを言いながら、そんな内心をはぐらかした。

「そんなクーデターだなんて………冗談でも笑えませんか」

メイドさんは、そんな銀時の軽口ですら顔をしかめていたが、なんとか頭を下げるのは止めてくれた。

（ん………、ちょっとこれは俺の会ったことのないタイプの女だな）

銀時は、そんな純朴すぎるメイドさんを見ながら、密かにそんなことを考えた。

「……………あゝ、そう言えば自己紹介がまだだったな。いつまでも、使い魔さんは勘弁だ」

と、そんな内心をごまかすためだろうか。銀時が突然そんなことを言った。

「え？」

少し面喰ってしまうメイドさん。しかし、銀時は構わずに、そのまま自己紹介を始めた。

「俺は坂田銀時。名前が銀時だ。好きに呼んでくれればいいぞ」

両手がふさがっているので不格好だが、銀時はそれでもメイドさんにそう言うと、先を促すように食器を動かした。

「あ、はい。私、この学院にご奉公に出させていただいているシエスタと申します。えーっと、ギントキさん」

メイドさん——シエスタは、少しもったが、すぐにとりなおすと実にメイドらしい礼儀正しい態度で、自己紹介を返してくれた。

「んー、さん”付けか………なんか、固いな。呼び捨てでいいぞ？」

「そんな！貴族の使い魔を呼び捨てになんて………」

「でも、俺固苦しいのはな……」

「うーん………分かりました。じゃあ、ギンさんでは？」

「ギンさん………？なんだ、この呼ばれたこともないのに、爺臭い呼び方なのにしっくりきてしまうこの感覚は！？」

こうして、銀時はこの異世界に来て、初めて“友人”と呼べる存在に出会ったのであった。

その後、銀時はシエスタの計らいで、無事紅茶とクックベリーパイをゲットすることに成功した。

そして、今はようやくそれをルイズの前へ並べ置いたところであ

る。

「遅かったじゃないの。お茶入れるのに、どれだけかかっているの？」

と、銀時を待っている間手持ちぶたさにしていたらしいルイズが、第一声そんな文句を言ってきたが。

「ワゴンがちょうど厨房に戻ってたんだよ。近くのメイドさんに聞いて、ようやくゲットしてきたんだ。勘弁してくれ」

と銀時は、ちょっと嘘をついて、なんとかその場をごまかした。

「ふーん……………まあいいわ。最初だしね。でも、次はないからね！」

銀時の言葉を聞いたルイズは最初こそ、微妙に不満げな表情だったが、すぐに目の前のクックベリーパイに意識が移ったのか。それだけ言って、目の前の皿にかぶりついていた。

（くくく、やはりガキだな……………、まあ確かにこれはうまかったが）

そして、密かに甘味を補給している銀時であった。

そんな風に、中庭の使い魔コミュニケーションは、割かしスムーズに穏やかに進んでいた。

あの事件が、あるまでは……………

「最低ッ!!」 バリンッ

「「？」」

突如、穏やかだった中庭にそんな叫びと、ガラス……………とい
うか、ボトルが割れるような音が響いた。

何事だ？とルイズと銀時は、その音がした方を振り返ってみた。

見ると、そこには何やらすでに人だかりが出来上がっており、一
人のクルクルカールの金髪の女子生徒が、その人だかりを押しわけ、
鬼もかくやという剣幕で立ち去っていくのが見えた。

（なんだ……………？）

そのちよつと尋常じゃない雰囲気、銀時は首を傾げる。しかし、
同じようにその騒ぎを見たルイズの反応はそれとは真反対だった。

「あゝ、またギーシュの奴がやらかしたのね……………」

まるで、テレビのニュースで、度重なる汚職事件を見たかのように
な、呆れた態度であった。

「また……………？」

銀時がそのルイズの態度に、首を傾げながら言った。

すると、ルイズは甚だバカバカしいという感じで、話出してくれ

た。

「あゝ、そっか。アンタは初めてね。あのね、アレはギーシュっていう、バカが招いた茶番なのよ。女癖が悪い奴でね。いろんな女の子にちょっかい出してはあーやって、その女の子にしばかれてるの。大方、今回は二股ってところじゃないかしら？」

「あゝ、なるほどな修羅場って奴か」

「そんな大層なものじゃないわ。茶番よ、茶番」

ルイズはそんな感じで懇切丁寧に、銀時にあの騒ぎの原因たるギ―シュという男を語ってくれた。

そのあまりの醜態ぶりに、さすがの銀時も呆れてものが言えないようだ。

まあ、将来はその3倍の6股をなす主人公になってしまうのだが
.....

ルイズは銀時にそれだけ話すと、もう興味が失せたのか、まだ残っていた紅茶を静かに飲み始めた。

銀時も、もともとそんな野次馬根性盛んな方では無いので、ルイズの説明を聞いただけで、ある程度満足し、あとは高みの見物とばかりに、ルイズの後ろで遠巻きに騒ぎの決着を眺めていた。

（しかし………女は行っちゃまったって言うのに、全然騒ぎが治まらんなあ）

そんなことをボーッと考えながら………

その時だった。銀時の視界に一瞬分かれた野次馬の壁から、なんだかひどく最近見たことがある黒と白のエプロンドレスを着た少女が必死に頭を下げているのが見えたのは………

「ふう、おいしかった♪やっぱり、クックベリーパイと紅茶の組み合わせは最高ね♪と、アンタ！そろそろ部屋に戻るわよ！今日は読みたい本があるのよ！」

ようやくお茶の時間が終了したルイズは、背後にいらるであろう銀時に大声で呼びかけながら、勢いよく席をたった。

しかし………

しゅん

一向に背後から、いつもの気の抜けた返事が返ってくることはなく、また付いてくる気配もない。

さっきまでご機嫌に先を歩こうとしていたルイズは、それに気づくと、瞬時に眉間にシワを深く作り、勢いよく後ろを振り返った。

そこには……………

「ん？ ちょっと、アンタ！ せめて、返事くらいしたらどうなの……」

「決闘だッ！！」

「上等だ！ このバラ野郎！！ 吠え面かせてやんよ！！！！」

「ああ、ダメ！ ダメ、ギンさん！！ 貴族と決闘なんて、殺されてしまいます！！」

何故か、自分の使い魔が学院のメイドの盾になるようになりながら、件の色バカ男ギーシュの決闘を気持ちのいいくらい堂々と買っている光景があった。

「な、なななななな何やってんのよ！？ アイツウウウウウウウウウー！！！！！！！！」

ルイズの叫びは、直後に沸き起こった野次馬の歓声にかき消され

てしまった。

第6話：中庭乃宴（後書き）

いかがでしたでしょうか？次回はいよいよ決闘です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1959v/>

銀色の使い魔

2011年8月6日17時22分発行